自由からの逃走

ERICH FROMM/著　　日高六郎/訳

東京創元社発行

　　　　　報告者　松本倫明

~２章~　個人の解放と自由の多義性

第一次的絆

人間は元々外界(自然、他者)と分離されていない。例えば、人間は元来、自然の一部であり、子供は母親から独立しきれない。フロムは、この外界と人間との関係を「第一次的絆」と呼ぶ。この絆は、人間に対し、安定感(≒社会的役割)と方向性(≒帰属感)を与える。また、人間がこの絆から解放される事は、その安定感と方向性が失われる事を意味する。ならば彼は、「みずからに方向をあたえ、世界のなかに足をおろし、安定を見つけ出さなければならない。(P35L8)」自ら安定を得る方法は二通りある。第一に自発的に外界と関係を持つ事、第二に自己を放棄して外界に服従する事である。

自由の多義性

●~からの自由…解放のこと。　例)第一次的絆からの自由

●~への自由…目指すこと。　例)個性を積極的に実現する事への自由

人間の社会史

人間は本能や自然から解放される事により、初めて人間存在となった。またこれが人間にとって初めての「~からの自由」である。以降、人間はますます個人を解放していく(個性化)。しかし個性化の中、個人は孤独や不安を募らせ、自分の役割や人生の意味に疑いをもつ。ここで自ら安定を得るには、個性を実現する(~への自由)か、外界に服従するかを選択する事になる。

結論から言うと、人間は「~からの自由」を実現できても「~への自由」を実現する可能性をもっていなかった。代わりに、自由から服従へとの逃避が生じる。

~3章~　宗教改革時代の自由

この章では、宗教改革時代における自由と人間社会について分析する、この分析から、現代の逃避のメカニズムとの類似が伺える。

１　中世的背景とルネッサンス

中世って何?

ここでは『自由からの逃走』から一旦離れ、一般に言う中世について簡単に説明する。ヨーロッパの歴史は大きく以下の三つに分けられる。

|  |
| --- |
| 古代…高度な文明を持つギリシャやローマの栄光の時代。 |
| 中世…5世紀から15世紀頃。国王、領主、農民の主従関係に基づく社会。イスラム世界に大きく遅れを取る。「暗黒時代」という認識が強い。 |
| 近代…暗黒時代からのから始まる、資本主義の時代。中世と近代の間に近世があるとする区分法もある。 |

資本主義って何?

事業をするにあたって必要になる金の事を資本と言う。何かを作るには、資本(つまりお金)と土地と労働が必要となり、この三つを「生産三要素」と言う。

資本を投下して生産し、その生産物により、投下した以上の利益を得る事を目指すのが資本主義である。資本主義の大まかな特徴は以下の通り。

|  |
| --- |
| 私有財産…個人又は団体の財産　(⇔国有財産、公有財産) |
| 私企業による生産…民営の企業。(⇔公企業) |
| 利潤を求めた、市場における競争。需要(欲しい!) と供給 (あげる!)。 |

ルネッサンスって何?

古代ギリシャ・ローマの文化を復活させようとする運動。神中心で禁欲的な中世の文化ではなく、人間のありのままの姿を重視()。

ルネッサンスの要因には、イスラム圏との貿易による富の増加や文化の流入がある。

少なくとも本章ではルネッサンスは明確に上記のような定義をされていないが、経済的に成長した上層階級の文化である事が強調されている。

中世の個人観

近代社会と比べて、中世社会は個人的自由を欠いている。当時人は誰でも、ギルドという組合の中で、自分の社会的役割へ繋がれていた。また彼らは帰属感を持ち、孤独ではなかった。

ところが、この中世的社会は変化した。自由競争や個人主義の様相が強まる。人間は第一次的絆から解放され、他者と自分を明確に区別し、精神的に個人となった。

矛盾—力と不安の増大

ルネッサンスに始まる個人の解放により、個人は帰属感や社会的役割を失い、全てを自らの努力で背負う事になった。富裕な貴族や資本家はますます資本を蓄え、経済的な力を増大させた。しかし、同時に孤独から来る不安も増大させた。

一方、都市の貧民や農民の状態は悪化した。ハンナ・アーレントは『人間の条件』の中で「土地を収用し、一定の集団から彼らが世界に占めていた場所(≒家庭)を奪い、彼らを生命の急迫に曝す事(『人間の条件』P411L10)」により、つまり、労働者の土地(財産)を奪い、労働しなければ生きていけない状態にした事で、資本家は自身の富を増大した、と指摘する。彼らは、資本家から搾取され、資本や市場、仲間、生きる意味に関する不安に襲われた。

2　宗教改革の時代

キリスト教の類型

キリスト教について、本書に関する限り、重要な事項のみを簡単に説明する。

キリスト教の聖典として主に「旧約聖書」「新約聖書」が挙げられる。「約」とは「契約」のこと、つまり「聖書」は神との契約である。聖書によると、人間は生まれた時から罪(原罪)を負う。死はその罪によるものである。しかし、イエスを信じる者は、「永遠の生命を受け、裁かれる事がなく、死から命に移っている(ヨハネ5章24節)」とあるように、キリスト教信者は、来世で神によって救われるのである。

キリスト教はその歴史の中で様々な宗派に分かれたが、ここでは本書に関する限り、カトリックとプロテスタントについて説明する。

|  |
| --- |
| カトリック…バチカンにいる法王を頂点とした「教会」を重視。罪深い人間は、教会の儀式や罪の告白を通して、神に近づく。教会は、神と人の間の媒体である。一方、教会は人間の尊厳や意志の自由を認めている。 |
| プロテスタント…教会を通さずとも、神は常に各人を見ている。救いの術は信仰のみ(信仰義認説)、心の拠り所は聖書のみである(聖書中心主義)。宗教改革によって、カトリック教会から分離した。 |

宗教改革時の精神の分析

前節において、中世の社会的背景を確認した。この背景の下、ルター、カルヴァンの宗教改革が起こる。ここで、宗教的原理を、心理学的に分析するにおいて、重要な試みがある。

|  |
| --- |
| どのような性格的特性が、ある人に特定の思想を抱かせたのか |
| 上記の思想を受け取る人間の性格構造はどのようなものか |
| 思想や観念が生まれた、根本的な心理的原因は何か | |

ルターの宗教改革—ルターを軸に

ルネッサンスの結果、貴族や大資本家は自己の経済的地位を高める事になった。一方、中産階級に訴えかけたのは、ルターの神学であった。この神学には二つの重要な側面がある。

|  |
| --- |
| 宗教的問題で人間に独立性をあたえたこと(P82L8)=教会から権威を奪い、個人に与える |
| 人間の根本的な悪と無力(P83L2)→個人にもたらされた孤独と無力(P82L15) |

ルターによると、人間には生まれつき悪が存在し、故に善を選ぶ自由が欠けている。この人間の腐敗と無力を確信することが、神の恩寵を受ける条件となる。なぜなら神の正義とは、人間が全く見知らぬものであるからである。人間の成すべきことはただ、神の意志に任せることである。しかしこれでは、自分が救われる事を確信する事はできない。そこでルターは信仰義認説を唱える。すなわち、信仰は神によって与えられるものであり、人間は信仰することで、救済を確信する事ができる。

しかしこの確実性の追求は、純粋な信仰を表したものではない。むしろ圧倒的に強力な外部の力に服従する事で、孤独や不安を取り除こうとしたのである。

ルターの宗教改革—支持者を軸に

中世の社会秩序の崩壊とともに、人間は精神的な束縛から自由になった一方で、孤独と不安を募らせる。そしてこの孤独は、自己の無意味さを感じさせる。この無意味感を、ルターの神学が表している。そして、彼は、彼らに対し、個人を捨て去り、神に服従するという解決策も与えたのである。

カルヴァンの宗教改革

ルター同様、カルヴァンも教会の権威を否定し、個人の無意味と無力の感情を表現した。そして完全な服従によって、個人は安定を得る事ができる、と説いた。一方、カルヴァン独自の教義が以下の二つである。

|  |
| --- |
| 予定説…誰が救われ、誰が罰せられるかは、現世での行ないに関わらず、予め神によって決定されている。 |
| 努力の重要性を強調する |

第一の予定説は二つの心理的意味を持つ。第一に、個人の無力、無意味さを強めている。人間の運命は既に決定されており、その意志や努力に価値はない。ところが、ルターの場合、信仰が救済の確実さの答えとなったように、カルヴァンの場合でも、カルヴァン主義に帰依する事が確実性を与えた。第二に、生まれながらの不平等を強調する。運命の不平等は人間の間の連帯を否定する事になる。

第二の努力の重要性は、一見予定説と矛盾するように思える。しかし、努力によって現世で成功する事は、来世で救われる人間に選ばれている事の証であると考えられた。そして死後の世界に不安・疑いを持つ人々は脅迫的に努力せずにいられなかった。

敵意と反感

これまで不安と無力感という真理を見てきたが、ここでは敵意・反感を分析する。中産階級の人々がこれらの真理を抱いた原因は以下の二つである。

|  |
| --- |
| 富める者に搾取される虞 |
| 資本家が見せびらかす権力 |

ルターとカルヴァンは、この敵意を無意識に抑圧していた人々に訴えかけた。例えば、カルヴァンは、上層階級の人間は永遠に罰せられると定められている、と説いた。

また敵意は他者だけでなく、自己卑下という形式で自分自身にも向けられている。